漢字書き取りが第一の苦手

正直に言って、私は、大東文化学院で、岡井慎吾先生について説文学を学ぶまでは、“漢字の書き取り”が最大の苦手であった。とりわけ、小、中学校時代には、漢字の書き取りほど悪い点を取った科目は他にない。だから、“漢字の書き取り”という言葉ほど、耳にして不愉快になる言葉は他になかった。

今でも多くはそうだが、“漢字を書く力”は、一つの漢字を何度も繰り返し繰り返し書く練習をすることの量の多寡がこれを決する。書く練習をしない限り、漢字を書く力は絶対につかない。ところが、私は、この反復練習がまことに嫌いだった。いや、“練習”なんてものではない。国語のノートを取るということさえ嫌いで、中学時代、ノートを持たないことで有名でさえあった。　中学時代、定期的にノートを提出させ検閲する国語の先生があった。私は、この先生に「私はノートを取らないので提出しません」と断わった。そのくらい徹底して書くことを嫌ったのだから、“書く力”がつくはずがなかった。今、中学卒業記念アルバムの末尾にある学友全員の寄せ書きを見ると、“イシイイサオ”と、私だけがただ一人カナ書きをしている。これを見ると、当時の私はよほど徹底して漢字を嫌っていたんだなあと、改めて感慨深く思い出す。

とは言うものの、“漢字を読む力”は抜群に強かったのである。小学校に入学する前から、本を読む楽しみを覚え、学友のだれよりも多くの本を読んでいたので、学校で初めて学習する“新しい漢字”でも、私に読めないものはまずなかった。

だから、中学に進んで初めて漢文というものを学ぶようになった時、多くの学友たちが「読めない漢字が多い」ということで、漢文嫌いになっていったのに反して、私は漢文が大好きになってしまった。漢文では、漢字の書き取りなどさせない。ただ、読めさえすればよいのだから、読むことが好きで、それが得意な私には打ってつけの学科だったわけである。このことが、当時、漢文において最高学府であった大東文化学院に進学させる動機になった。つまり、私に現在の道を歩ませる理由になったのである。

しかしながら、岡井先生の説文を学ぶまでは、漢字を書く能力は学友に比べてひどく劣っていた。当時の大東文化学院は、今の大学の専門課程で専攻している漢文の原書を六年間専攻させるという特種な学校であったから、さすがに漢字を書く能力も自然と伸びていったわけだが、ほんとに“漢字を書く力”がついたのは、岡井先生の説文を学んでから後のことである。